

アンナプルナ トレッキング

白石病院 鴨 川 淳 二

「鴨ちゃん、アンナプルナにしませんか？」
山好きの恩師・能勢真人教授（愛媛大学医学部ゲノム病理）の退官記念にエベレストを見ようと、かねてから計画をしていた。しかし、先生のこの一言で、行き先が変わった。

2011年4月9日、ヒマラヤ・アンナプルナI峰（8,091m）を望むために、そのBase Camp（4,130m、以下ABC）までのトレッキングの旅に立った。私にとっては3度目のヒマラヤになるが、今回は恩師の退官記念に加え、山は初めてという私の妻も同行したことなど、特別な意味のある山行になった。

ヒマラヤには8,000m峰が14座ある。その多くがネパール王国にある。この美しい山々は、その神々しさ・神秘さを讃えて「神々の御座」と呼ばれる。中でもアンナプルナ峰は登山家にとって特別な意味がある。それは1950年、モーリス・エルゾグ¹⁾率いるフランス隊が人類初の8,000m峰の登頂に成功した歴史的な山だからだ。その優しい外観から豊穡の女神とも呼ばれる一方、登攀中の死亡者が多く Killer Mountainという別名もある。

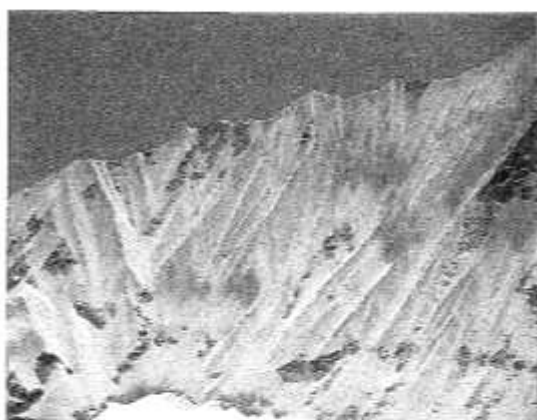
ネパールへは日本からの直行便がない。タイ経由で首都カトマンズ入りし、その後、国内線に乗り換え、観光都市ポカラに入った。これよりバスで揺られること数時間、出発点のナヤプルに着いた。ここから8日間に及ぶトレッキングが始まった。強い日ざしの中、砂埃舞い上がる土の道を、一歩ずつ踏みしめながら歩き始める。登山のコツはとにかくゆっくり歩くこと。急ぐと、捻挫したり、高山病になったりと、良いことはない。

山の朝は6時起床。小さな洗面器1杯のお湯で洗顔を済ませ、ヤクルト2本分位の水で歯磨きを終わらせる。その後着替え。我流乾布摩擦。7時に朝食。8時に出発。前夜の合い言葉は「朝は6・7・8」。

日中はそれぞれのペースで歩く。高く青い空、道、草花、鳥、ヒマラヤの山々、そしてそこに暮らす人々。これらがヒリヒリ・セカセカな Japan mode の私を解放してくれる。ヒマラヤには独特の時間の流れがある。旅日記を紐解いてみると、私の慢性疲労症候群も5日目から全復しており、声も非常に良く出るようになった。体調はすこぶるよい。

毎日、昼過ぎにはその日の目的地に着く。宿泊はロッジ。その日の行程が終わり、重い靴を脱ぐ瞬間はなんともいえない爽快感がある。足で息ができるようになる。「あーすっきり！」ウエアも靴下も替えて頭から水をかぶる。歩き抜いた達成感と疲労感で肉体から充実感を感じる。昼食は同行したコックとシェルパが手際よく準備して下さり、温かい食事が体を内側から温める。

午後はのんびり。ただのんびりと山と過ごす。山では自身が一個の動物に戻るような気分になる。不思議だ。15時に Tea time がありビスケットと、砂糖をいっぱい入れたチャイを飲む。夕食は18時。食事はなるべく多く摂るように努めて、明日のエネルギーを補給する。能勢先生がザックに忍ばせていたブランドーは皆の表情を和ませてくれた。20時消灯。マイナス25度対応の寝袋に潜り込む。毎日、落ちるように眠った。

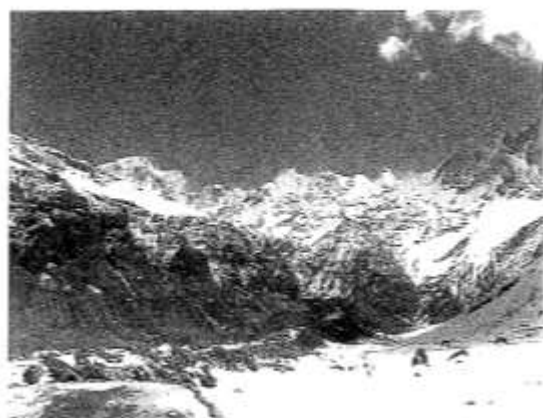


マチャブチャレ北稜のヒマラヤ巒

山の空は変わりやすい。突然の雨に急いで雨具をはおり、ザックカバーを付ける。私は

泥よけのスパッツを初日から付けていたので、ズボンと靴の汚れが少しは抑えられた。3,500m近傍から雪が舞い始めた。雪が降ると周辺の景色も一変する。深夜になると、ロッジの外はマイナス5~10℃まで冷え込む。夜中にトイレに行くと、便器周りが完全に凍っていて、大便もを外しそうになる。因みにどこのロッジも自力水洗であり、自分のものは責任もって水をくんで流さなければ、人に迷惑が掛かる。

山歩きから6日目。マチャブチャレ B.C. (3,703m) に着く。この山は魚の尾の形をしていることから、Fish tail の別名がある。ネパリアンにも崇拝されている人気の山である。アンナプルナはもうすぐそこに見えている。夜が明け、いよいよ最後のトレッキング、ABC を目指す。しかし、出発から雨にヒョウ。あげくの果てには頭上で雷が鳴り始めた。生きた心地がしない。マチャブチャレ B.C. まで一旦引き返し、天気の回復を待った。1時間後、雷は少し収まったが、あたりは一瞬



ABC 東面 (人も写っています)

で雪景色。アイゼンは用意していなかったが、何とか無事 ABC にたどり着いた。「やったー！」

4,130m はさすがに寒く、ロッジでは大きなストーブが食卓の真下で焚かれていた。風雪は全く回復する様子も無く、アンナプルナは全く見えない。ロッジの中で気だるい時間が流れた。ABC 2 日目の早朝 5 時に頂上を拝みに、近くの丘に登ったが、アンナプルナは全く見えなかった。さすがに私も全身が凍てつき「もう指が凍りそう！」と Wife に訴えると「私なんかとっくに凍ってる！」との返事。本当に冷たかった。

明日は下山という夜。「アンナプルナは見られないままかな」と思いながら寝袋に入った。夜中の 1 時、寒さのあまり目を覚まし外に出た。なんと月明かりの中、雪化粧したアンナプルナが一面に開けている。あまりにも神秘的な風景に感激し、急いでメンバーを起こす。同行した信濃喜六さんはそれから徹夜で夜のアンナプルナを写真に収めていた。そのベストショットを後に頂いたが、大切にしまっている。

出発の朝の ABC は快晴。2 日間の憂鬱を吹き飛ばしてくれるように、360 度パノラマ view で山が広がる。白銀の壁だ。この地点から標高差約 4,000 メートルの頂が真近に見える。この標高差の view はめったにないという。光り輝く一面の白に抱かれた未知の空間。まぶしすぎてサングラスなしでは目も開

けられない。そのスケールの大きさはどのような言葉をもって説明をつけ難い（写真は同行した伊藤道彦さん撮影）。言葉の無意味ささえも感じた。あらゆる雑念を削ぎ落とすような、エネルギーの塊がそこにあった。

帰りは ABC からヘリコプターで一気下山。12 分間でボカラに着き山行は終わった。

8 日間の山の生活を共に過ごすことができたメンバーは、各々が任意に参加を申し込んだ男 8 人女 2 人（ガイド 1 人）である。メンバーの平均年齢（男性）は 60 歳。65 歳以上の方が 6 人おられた。全員私より足腰が丈夫だと思う。

今回の旅で、もう一つ面白いことに気付いた。それは 65 歳の大先輩方も幼少のままである。食事がとても早い人、食事マナーのいい人、いつも文句ばかり言って皆を笑わせている人、すぐに一人になりたい人、もの静かな人、いつも熟考している人などなど……。仕事や家族、様々な社会性から解放させると本来の自分が現れるのだろう。例えば、誰しも両親は 1 組で、仕事の上司だって数人だ。だからこの身近な先達が一つの道徳の基準となる。しかし大先輩が数人集まると個性は様々だ。あらゆる煩わしい事から Off-duty になったこの山の環境においては、一個人が強力に現れる。人は幼稚園・小学生の時から変わらないのかしらと Wife と話し、自身はどうなのかと考えるきっかけとなった。

今でもこの山のことを思い出す。Annapurna Sanctuary はアンナプルナ内院と訳される。旅の前に「この内院って言葉がわくわくします」とおっしゃったメンバーの一人、伊藤さんの気持ちが今になってよく分かる。今回は十分に準備をした。不安は山ほどあったが、未体験の世界へ足を踏み入れ、多くの欠乏の中に、すべてが解放され、満たされる旅であった。そして、山で始まった朝の乾布摩擦は、今でも私の日課となっている。

文 献

- 1) 「処女峰アンナプルナー最初の8,000m峰登頂」 モーリス・エルゾーグ 山と溪谷社



アンナプルナ I 峰とアンナプルナ氷河

2011年1月1日付けで今治市医師会に入会させていただきました。引き続き市民の健康維持の為に少しでも力になれますよう精進します。今後とも宜しくお願い致します。

